

ダンジョンに金色の戦
士がいるのは間違って
いるだろうか

しろーとー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

セルゲームでセルが自爆前のifストーリーです

いわゆるドラゴンボール×ダンまちです。

まだベル・クラネルがオラリオに来る3年前のお話です。

原作知識はほぼ皆無。アニメしか見ていないので話がかみ合わない部分が
多々でてくると思いますが、優しい目で見守ってください

※オリジナル要素が増えていくと思いますので苦手な方はオススメしません
本当にどこにでもあるようなストーリーを自分なりに考えて
必死に必死に作り上げていければと・・・

ストーリーにかんしては、これから考えていくのでどうなるかはまつたくもって未定です。投稿頻度も不定期です。

目

次

プロローグ 前編
プロローグ 後編

第1話
第2話
第3話
第4話

43 36 25 17 11 1

プロローグ 前編

「畜生……チクショオオオオオオオオオオオオオオオオツッ!!!!」
僕は叫んでいた。泣いていた。自分のつめの甘さを、相手の力量を見誤っていたことを。

後悔をしていた。

ドラゴンボールさえあれば、みんなを生き返らせることができる。
ドラゴンボールさえあれば、町も元通りにできる。
・・・甘かつた。倒せるときになぜ倒さなかつたのか。

相手は父さんやベジータさんを脅かした相手なのに・・・僕は本当に馬鹿だ。

「ハツハツハツハッハ！終わりだあ！！地球もろともなア!!!!」

自分に嫌悪感を抱きながら、地球の破滅とともに意識は闇の中へと消えていった・・・

迷宮都市オラリオ。『ダンジョン』と呼ばれる地下迷宮を保有する巨大都市。そこでは冒険者たちが日々ダンジョンに潜り、糧を得ている。冒険者は神の作る「ファミリア」に入る事でその主神の眷族となり、神の恩恵を得ることができる。

そして「ファミリア」と言つても様々、大人数を擁する「ファミリア」もあれば、日々の食事代も怪しい零細「ファミリア」も存在する。

そんな数多ある「ファミリア」の中でも最高峰に位置する「ロキ・ファミリア」の名が

ダンジョン探索、および鍛錬から帰還する道中であつた。

現在、ダンジョンの18階層、いわゆる安全階層（セーフティポイント）と呼ばれる場所で一度

休息をとろうとしているところである。

するとアマゾネスのティオナ・ヒリュテが口を開いた
「ねえ、結構汗かいたし水浴びにいってもいいー？」

「私もく、ずっと動きっぱなしだったのよね」

ついで、ティオナの姉であるティオネ・ヒリュテも一言

「ああ、構わないよ。みんなでいつてくるといい」

そう言つて荷物をまとめているのは、オラリオでも有数の実力者。そしてロキ・ファ
ミリアの

団長であるフイン・ディムナである

「アイズ、君も一緒に行つて来たらどうだい？」

「うん、そうする」

短く答える彼女はアイズ・ヴァレンシュタイン。感情の起伏が薄い彼女もまた、長丁
場の戦闘

で汗をかいていたのだろう。

「リヴェリア、君はどうする？」

「わたしは遠慮しておく。荷物番でもしているさ」

ロキ・ファミリアの副団長であり、オラリオ最強の魔導士でもあるエルフの美女、リヴェリア

・リヨス・アルヴは王族出身ということもあり、他人にあまり肌を見せることはない。

い。

断つた理由もそういうことだろうと察した。

「わかつた。それじやあ、僕は邪魔になりそうなものをリヴィラで換金してくるから、各自準備

ができたらまたここに集合ということにしようか」

「「「はーい！（コクリ）」」

そうすると各々行動に移つた。荷物番であるリヴェリアも少し休もうと腰を下ろそうとした。

その時、何者かの気配を感じた。とても弱々しいが人間の気配だろう。よく目を凝らして周り

を見渡すと、森の中、木の陰に人が倒れていた。

リヴェリアがすぐにかけよると、全身傷だらけで衰弱しきつた一人の少年がいた。

「ひどい……！一体何と戦つたらこんな怪我を。とりあえず早く応急処置をしなければ」

そういうとすぐさま詠唱を唱え始める。まもなく魔法は発動し少年の体の傷は癒え

ていつた

しかしこの怪我では内臓にまでダメージが及んでいるだろう。いくら魔法といえども万能ではない。目に見える外傷や骨折などを癒すことはできても、臓器

まで元通りにすることはできないのだ。

「しようがない、エリクサーを使うか」

本来であればファミリア外のものにはあまり干渉しない方がいいのだが、今回は命に関わる

深刻な事態だ、仕方あるまい。そう思いながら荷物からエリクサーを取り出す。
そして抱きかかえるようにすると

「少年、少年。意識はあるか？」

「ハア・・・ハア・・・」

返答はない。呼吸はしているが、やはりとても苦しそうである

「仕方あるまい・・・んつ・・・」

リヴェリアはエリクサーを口に含むと、直接少年の唇へと運ぶ
「（少し辛抱してくれよ）んつ・・・ちゅる・・・」

「あつ・・・んつう・・・ゴクツ・・・ケホツ、ケホツ・・・」

よし！呑み込めたか。確認すると、残りもゆつくりと移していく・・・

そうすると少年の辛そうな呼吸も少しづつ落ち着いてきた。どうやら一命は取り留めたようだ

「よかつた・・・しかしなぜこのような子供がダンジョンでひとり・・・？」

それに装備などを確認しても、防具はおろか武器すら持っていないではないか。服も破けてい

るようだし、とても冒険者には見えない。そういう考えていると、どうやら少年が目を覚ましたようだ

「んっ、ここは・・・？あなたは・・・っ！」

「少年、落ち着け。まだ傷が癒えたばかりだ、無理に起きるとまた傷口がひらいてしまうぞ」

「あつ、はい！すいません。つよつと・・・」

「大丈夫、そうだな。一時はどうなることかと思つたが。」

「えつと、助けてもらつたみたいで、ありがとうございます。」

「なに、気にすることはない。それよりも君に聞きたいことがあるのだが」

「はい、なんでしようか？」

「なぜ君はこんなところにいる？君は冒険者なのか？」

「こんなところ……？つてよく見たらどこだ？ここは森の中かな？それに冒険者ってなんのこ

とだろう。探検家とかのことかな。ダメだ全然わからないや

「……がどこなのはごめんなさい、わかりません。それにその【冒険者】というの

もよくわからないのですが」

「!!なにも知らずに君はこんなところで倒れていたというのか!?」

「ええ、まあ・・・ア、アハハ（僕何かまずいことしちゃったのかな・・・！）

「はあ・・・まあいい、続けるぞ。君の名はなんという」

「えーっと、孫 悟飯です」

「ソン・ゴハンか、変わった名だな。わたしの名はリヴエリア・リヨス・アルーヴだ。リ

ヴエ

リアと呼んでくれ。出身はどこだ？」

「リヴエリアさんですね！えーっと、出身はパオズ山つてところなんですが・・・」

「・・・？聞いたことのない場所だな」

「そ、そうですよね！田舎ですから、アハハ！」

悟飯が少し困ったように笑つてみせると、リヴエリアはそれを読み取つたのか申し訳なさそうに

少し眉をひそめ謝罪をしてきた

「いや、こちらも知らなくて申し訳ない。知識不足だ」

「いえいえ！頭を上げてください！全然気にしてませんから！……あ、そうだ。僕もリ
ヴエ

リアさんに少し聞いても良いですか？」

今度は悟飯がリヴエリアに問いかける

「ん？なんだ」

「その……僕、「ヤツ」と戦つてたはずなんですが地球はどうなったのかなーと……」

「ヤツ……？ヤツとは一体誰のことだ？あと、チキユウ、とはなんだ？」

「えっ!?えーっと、「ヤツ」、名前は……っ！（なんだ、急に、頭が痛い……それに

「ヤツ」の名前が思い出せない）

「ゴハン！大丈夫か!？」

悟飯が突然頭を抱え苦痛な表情をしたが、すぐに冷静を取り戻した。

「え、ええ……大丈夫です。少し頭が痛くなつただけなので」

「そうか……無理はするんじゃないぞ。つと、質問の途中だつたな。チキュウだつたか、悪いが聞いたこともないな。どこかの街か?」

悟飯は疑問に思つた。地球を知らない……? 「ここは違う惑星なのかな……?」「えーっと、地球という惑星なんですが。ここは違うんですか?」

「すまない、君が何を言つてているのか理解できんが……?」「ここはオラリオというダンジョン」

を保有する都市だ。そして今いるここはそのダンジョンの中、18階層という安全階層だ。

君は何か目的があつてここに迷い込んだ、とかではないのか?」

「いえ、本当に気付いたらここにいたので……」

どうやら、お互いの認識がかなりずれてているようだ。それに悟飯に関しては全く、何も

わかつていないとといった状況だつた。

「そうか……わかつた。とりあえずは地上を目指そう。色々不明な点はあるが詳しい話はそれ

からだ。私たちもこれから地上に帰るところだ、送つていこう。それに君もまだ万全ではな

いだろう

「でも、いいんですか・・・？」

「構わないさ、なにかあつても責任は全てわたしがとる」

「・・・わかりました、ではお願ひします！」

「ああ、もう少しで仲間も戻ってくるだろう、出発の準備でもしておこう」

「はい！」

こうして、交わることのなかつた線と線が交差した――――――

後に語り継がれる【伝説の金色戦士】と呼ばれる少年の物語の幕開けなのであつた

プロローグ 後編

悟飯は待つてゐる少しの間、リヴエリアから話を聞いていた。

このダンジョンには各階層ごとに恐ろしいモンスターがいるということ。そして冒險者の大半

は、モンスターの胸部などの中心部に存在する生命力の核【魔石】を換金し主な収入源としていること。

そしてリヴエリアもまた冒險者であり、オラリオでも最高峰に位置するロキ・ファミリアの副団

長を務めているということ。

悟飯は自分の住んでいた星とは随分違うんだなく、などと考えていると、森の奥から自分と同い

年ぐらいの少女が3人、こちらに向かってくるのに気付いた

「あれ～？リヴエリア、その子誰～？」

「見かけない子ね。どこの子かしら？」

「まあ待て、もう少しでフィンも戻つてくるだろう。みんな揃つたらちやんと説明する」

数分もすると、リヴィラと呼ばれていた街の方向から小柄の少年・・・もとい、実年齢40代

ロキ・ファミリアの団長であるフィン・デイムナも姿を現した。

「やあおまたせ。僕が一番最後だね。・・・つとここれは一体どういうことかな？」

フィンが笑顔で問いかけた。というのも、この数分の間軽い自己紹介を済ませていた
少年と少女達

であつたが、少女達はまるで不思議なものを見るかのように少年を見つめていた。

真っ黒な髪に真っ黒な瞳。見たこともないような服装。そして同い年とは思えないほどに鍛え上げ

られた強靭な肉体。どう考へても普通のヒューマンでないと疑つていた。

少年が困つたように笑いながらリヴィエリアの方を見ると、よし、と軽く息を吐き、口を開いた

「みな集まつたな。ではわたしから大まかな説明をしよう・・・」

・・・

「「「・・・」」

「あ、あはは・・・」

悟飯の渴いた笑いが聞こえるが、説明を聞いたロキ・ファミリアの面々は何とも言えない表情だ。

それもそのはず。瀕死の状態で森の中に倒れていた少年。目を覚ますと見たことも

聞いたことも

ない場所。そしてまるで聞いたことのない出身地。少年は何者かと戦っていたが途中からの記憶が

思いだせないときた。何もかもがおかしい。

「だが私は、この少年、ソン・ゴハンが嘘をついているとは思えない。それに致命傷を負つていた

のは紛れもない事実だ」

「ああ、僕も君たちが嘘をついているとは思つてないよ。ただ話が話だけにね・・・(それに単な

る感だが、この少年只者ではない気がしてならない)」

「でもなんかすごいよねー！もしかしてゴハンってすげーく強いの!?」

「こらバカティオナ！変なこと聞かないの！」

「えうだつてえ！てかバカつていうなー！」

「・・・私も、知りたい。君は、一体どんな修行をしていたの？」

なんと、普段無口なアイズまでもが問い合わせてきた。それに對し若干驚きつつも、リヴァエリアが

お前たちやめんか！と一喝、ついで

「ゴハンはまだ傷が癒えて間もない。あまり無理をさせるな

」

そういうと少女達はシュンと肩を落とし、日々に謝罪をしてきた。

「い、いえ！大丈夫ですから、リヴエリアさん！」

「・・・はあ、悪かつたなゴハン。だがとりあえず質問は後回しだ。物資も底をつきそうだ
なのでな

、そろそろ地上へ戻らねば。」

リヴエリアの言うとおりここにきて魔力の消費、回復アイテムの消費、空腹を満たす
ための携帯

食の消費などがでていた

「そうだね、とりあえずさつきリヴエリアがいった通り地上まで一緒に向かおう。それ
でどうだろ

う、よければそのまま僕達ロキ・ファミリアのホームへ招待したいのだけれど。」
フインがそういうと、リヴエリアもなにかを察したようである

「そうだな、それがいい！ゴハンよ。特に行くあてもないのだろう？」

「ええ、まあ・・・でもいいんですか？」

「ああ、むしろ是非招待させてくれ。客人として丁重にもてなそう！なにかあつても心配はないよ

僕やリヴエリアがいるからね。みんなもいいだろ？」

フインの問い合わせに答える

「わたしは全然オッケーだよ！」

「わたしあんまり意見に異論なんてあるはずありません！」

「・・・（コクリ）」

「というわけで、満場一致だ。となると善は急げだね。ゴハンくんは動けそうかい？」

「はい！大丈夫です！移動するのには支障ありません！」

「わかった、それじゃあみんな、出発だ！」

こうして一行は、地上。ロキ・ファミリアのホームへ向かい歩み始めるのであつた

第1話

悟飯含むロキ・ファミリア一行は特に大きな問題もなく地上へとたどり着いていた。

「今日はこのままホームに戻ろう。魔石やアイテムの換金は明日以降時間を見つけて各自

いってほしい。いいかな?」

「「「はい! (コクリ)」」

「それじゃ僕達ロキ・ファミリアのホームへ向かうよ!」

「はい! よろしくお願ひします!」

そういうと大通りを進んでいくが、やはり悟飯は元の世界とはどこか違う、そう思いながらみんなの後へ続く。

しばらくすると正面に大きな館が見えてきた。道中バベルやたくさんの酒場を見てきたが

それとはまた一線を画した建物であった

「あそこが僕達のホームだよ」

「わあく、すごく大きいですね・・・！」

「ありがとう。あ、そうだ。門を開いたら気を付けてほしいんだ。僕らの主神が失礼なこと

をするかもしれない、先に謝罪しておくよ・・・」

「は、はあ・・・？」

そんなやりとりをしていると彼らのホーム、通称『黄昏の館』に着いた。フインが先陣を切

り、門番であろうメンバーの一人に声をかけた

「今帰つたよ、門を開けてくれ
「はつ、開門——」

ガシヤ、ゴゴゴゴ・・・門が開くと奥の方から何やらものすごい足音が聞こえてくる
・・・ズドドドドドドドド

「みんなー！おーかーえーりいいいいいいいいいいいいい!!!!」

そう叫びながら朱色の髪をした女性が盛大にダイブしてきた。ロキ・ファミリアのみ
んなは

それにはながら気付いていたかのように次々と交わしていく

「ああ・・・（さつきフインさんが言つてたのはこのことかな？）」

悟飯がぼーっと眺めていると勢いを殺しきれないのか彼女がそのまま悟飯へと抱き
ついてきた。

「おおく！なんやなんや！そんなに寂しかったんか！今日のアイズたんは甘えんぼさんや

「なあ！しゃーないうちがたくさん可愛がつてあげるわ！グヘヘ」

「あ、あのゝ・・・」

「なんやアイズたん声変わりかく？ショタボイスなんかになつてしまつてどないしたん？」

それになんや随分と体つきもガツチリしてまるでムキムキマツチョマンやないかあ
ヽ。サワサワ

あのやわあゝいモチモチ肌のアイズたんはどこへ行つてしまつたん・・・？モミモミ
ハツ！まさか鍛錬のし過ぎでこんななつてしまつたん!? うちのアイズたんがあああ
あ！！

「えゝつと・・・あはは（チラツ）」

「・・・はあ。おい口きいい加減にその少年から離れろ！・はじを知れ馬鹿者！・ゴスツッ！」
「あだあ!? 何すんねんリヴエリア！うちはただ帰つてきたアイズたんを労つてやさあ
しく

マツサージしてあげてただけやん！・・・つて少年？」

「相手をよくみろ。お前の眼は節穴か？それともその細い目は相手も見えぬのか？」

「……ああ、なんや。その……ホンマすまんかつた！ちやうねん！みんなが無事で帰つて来てくれたんが嬉しくてつい！悪気はなかつたんや、ほんまうちが悪かつた！」

そういうと、先ほどロキと呼ばれていた女性は悟飯から離れると同時に土下座の体勢になり

勢いよく地面におでこをこすり付けていた。

「僕は平氣ですから！そんなお氣になさらず！」

「いいんだ、いつものことだ」

リヴエリアがそういうと、見ていたメンバーはみな揃えて首を縦に振った。なるほどこれがい

つも通りの光景なのか……そう思い苦笑いをしていると、土下座をしていた女性が口を開いた

「本当すまんかった。んで話を変えるが、その子は一体だれや？みたことない顔やけど」「ああ、そうだつたね。こちらの少年はソン・ゴハン。極東？の出身らしく出先で偶然あつてね

どうやらここに来るのは初めてらしくて、折角だし僕たちが案内がてらうちへ来ないかと声をかけた。というわけさ」

「・・・ほお、なるほどな。事情はわかつた！ フインやリヴエリアが招待したんや。それにうちも僕達、

無礼をしたんやし、断る理由なんてないわな！」

「そうだね、というわけだ。それじやゴハンにも紹介しておくね。こちらの女性はロキ。

ロキ・ファミリアの主神だよ。」

「あなたが・・・なるほど、よろしくお願ひしますロキ様！」

帰りの道中、悟飯はファミリアのことは軽く話を聞いていた。なのでそこまで大きな動搖はなかつ

たものの、やはりあるような光景を目の当たりにして多少なりとも不思議な人だなど

思っていた。

それに悟飯は既に気付いていた。口キから感じる「気」がなかつたのである。多少なりとも人には

氣を感じるものだが、それがなかつた。その時点で悟飯は違和感を感じていた。

だが、目の前にいる神口キはとてもフレンドリーで気さくな性格なので悟飯も安心したようだつた

「おおよろしゅうなゴハン！うちのことは気軽に口キたんつて呼んでええで！」

「そ、それは・・・考えておきますね。」

「なんやそんな氣い使わんでもいいのに！ま、ええか！せや、フイン、リヴエリアは悪いんやが

一旦うちの部屋来てくれるかー？ちょっと話があるんや」

「・・・ああ。それじや一旦ここで別行動だ。悪いんだけどアイズ、ティオネ、ティオナはゴハン

を客室へ案内してもらえるかな？」

「「わかった（わかりました！）」「

「それじや、夕食の時間になつたらまた案内するよ。それまで部屋でくつろいでいく

れ。」

「はい！ありがとうございます！」

こうして、オラリオで迎える始めての夜。
そして悟飯の大食い伝説の幕開けになるのであつた・・・

第2話

—ロキの部屋にて—

現在部屋の主であるロキ、それとフイン、リヴエリアの3名が揃っていた
話の内容はもちろんゴハンのことについてだ

「・・・リヴエリアが嘘いつとらんのはわかる。でもおかしな点が多すぎるんや」「それに関しては僕も同感だよ。彼の知識・・・おかしな部分が多すぎる。」「やはり本人も交えて詳しい話を聞くしかないようだな」

「せやなあ・・・とりあえず夕食にしよか」

「ああそうしよう。続きをまた後で、だね」

「そんじやういっぺんお開きや」

夕食が始まるころになるとファミリアのメンバーが続々と集まってきた

客人である悟飯もその中に混じつて食事をすることになつたのだが、徐々に周りの空気が変わつていつた

それもそのはず。まだ年端もいかない子供が尋常ではないスピードで食べ始めたのだ

始めのうちはまだよかつたのだ。周りにいた者達も「いい食いつぶりだ！」だの「負けるか～！」だの

笑いながら食事を楽しんでいたのだが、その衰えぬ食欲にだんだんと顔面蒼白になる
ガツガツガツガツ・・・ズズズー・・・ガツガツガツガツ

どんどん積まれていく食器達、慌ただしくなる厨房、笑顔が引きつっていく冒險者
達・・・

そんなものお構いなし、といつた感じで悟飯は満足するまで食事を楽しんだのだった
そんなこんなで悟飯が食事を終えると、タイミングよく口キがやつてきた

「自分・・・めっちゃ食べるなあ～！」

「あっ！はい、ごちそうさまでした！おいしかったです！」

清々しいくらいに綺麗に、大量に積み重ねられた食器。それに見合つた満足そうな笑

顔。もはやロキは感心していた

あるものは「なんだあのガキは！」と驚愕。あるものは「すごいのう・・・」と感嘆の声を上げていたのは別の話・・・

「お粗末さん！つと飯のことはおいといて、この後ちょっと話があるんやけど時間大丈夫か〜？」

「はい、大丈夫ですよ！」

「んじや場所変えよか。うちの部屋まで来てもらうで、ついてきてや〜」

ロキの部屋に着くと、中には既に先客がいた

「あれ？リヴエリアさんにフインさん？どうして・・・？」

「うちが呼んだんや。気にせんで大丈夫やで」

「はい、わかりました」

扉を閉め、他の者がやつてこないのを確認するとロキが話を切り出した

「早速やけど、いくつか質問させてもらつてもええか？」

「はい、大丈夫です」

悟飯は元気よく答える

「ありがとな。んじゃまず1つ目、自分どつかのファミリアに入つてるか?」

「いえ、入つてないです。ファミリアがあるなんて今日初めて知りました」

「そんじや恩恵(ファルナ)とかも知らんよな?」

「ふあるな・・・?ええと、初めて聞きました」

「せやろな!。そんじや次の質問や、ズバリ聞くが自分何もんや!」

「え?えーっと・・・僕は孫 悟飯で、地球生まれの! 「それや!!」 ——え?」

悟飯の発言に食い気味にツツコんだ口キ

「そのチキューっての! うちわからへんねん!」

「地球、という名前の星なんですが・・・そうだ、リヴエリアさんと話した時もそうだつたのですがここは

地球ではないんですか?」

「・・・はつきり言うたるが、うちはチキューなんて星は知らん。見たことも聞いたこと
もあらへん」

「やつぱり、そうなんですね・・・」

「やつぱりってことは、自分薄々感づいてたんか?ちゅーか随分冷静やな」

「ええまあ・・・他の星にいった経験があつたので。それに僕の住んでいた星の環境と結

構似てますよこ」

ナメツク星には行つたことのある悟飯だが、明らかにあの星よりも地球に近いと悟飯は思つていた

「へえ、そなんや……（アカン、頭おかしなりそうや）つまりあれや、自分異星人か！」

「多分、そうですかね……一応言葉は通じているのであまり差はないと思ひますけど」「んく、それもそうやな。よくはないけど、一旦よしとしよか……」

「はい」

「そんじや次いこか。ゴハン、自分なんか使命とかあるんちやうか？」

ロキは先ほどリヴィエリアから聞いていた、悟飯の記憶の穴について探ろうとしていた。

「使命、ですか……？僕は、えーっと……確か何か大事な戦いの最中で……」

「戦いか。どんな相手と戦つてたん？」

「はい、えつとすごく強い相手で。僕のお父さんはすごく強かつたんですがそのお父さんでも敵わないような。」

そんな絶対絶命の時、お父さんがお前なら勝てるつて言つてくれて。僕は精一杯戦つて、頑張つたんです」

悟飯は重い口を開き、それでもまだどことなく答えにたどり着けない。そんな様子で少しづつ語っている

「……ほう、それで？」

「それで、えーっと僕はその後頑張って……でも倒し切れなく、て……」

とても苦しそうに、今にも泣きだしてしまいそうな幼い少年の表情をみてたまらずリヴエリアは口を挟んでしまった

「お、おいロキー！もうその辺で『リヴエリア少し黙つとき』——ツ」

だが、ロキは許さない。まるで厳しい父親のように。これはとても大事なことなのだ。といわんばかりに

「続き、思い出せるか？」

「はい、えーと……仲間が傷ついて、僕も後一步のところで大きな怪我をしてしまつて。そして『ヤツ』が——ツ」

「ゴハン！？大丈夫か？」

だが悟飯に言葉は届かないまま、頭を抱えてうずくまつてしまつ。ダンジョンで見たあの表情だ――

なにか恐怖に満ち溢れたように、拒絶するように小さくなる少年

「あ、頭が——ツぐ……ボク、ノ、セイ、デ、ミンナ——みんな、ああああああああああ

ああああああ!!!!

ズゴゴゴゴゴ・・・

まるで悟飯の悲しみで大地が吠えるように、悟飯の叫びに呼応するように地面が大きく揺れ始める

「ー!?ま、まずい！話は中止だ!!ゴハン、落ち着くんだ!!」

フインが悟飯に呼びかけるが、届かない。

「な、なんや!?どないしたつちゅうねん！」

「まずいよ！何かしらのリミッターが外れたんじゃないか!?」

「嘘やろ!?!」

「嘘じやないのは君が一番わかっているだろう!!いいから早くここから逃げないと！」

フインは冷静に、だが一刻も早く口キを抱えて逃げようとしていると

「ーツ！ゴハン!!!」

リヴエリアが悟飯へと駆け寄っていく

「ちょ、リヴエリア!?危険だ早く君も「黙れ!!!」ーツ！」

「・・・ゴハン、大丈夫だ。ほら、落ち着け。」

リヴエリアは優しく、宥めるように悟飯へと話しかける。だが悟飯は泣き崩れ止まらない。まるでの時のー

【ヤツ】との戦いの最後をずっと、ずっと後悔してるかのようだ。

リヴェリアは【ヤツ】のことを一切知らない。知る由もない。だが心の底から思う——こんな純粹な優しい少年の心に、深いトラウマを植え付けたことを絶対に許さない。そして負けないと

(この傷は私が、私達【ファミリア】が絶対に治して見せる)

「僕は……僕はあああああ!!!!」

「悟飯!!!」

ビクッと肩を揺らす悟飯。大きな、それでいてとても優しい声。そして肩に触れる真っ白く柔らかい手

「……大丈夫だ、私を見ろ。」

目を合わせ、じつと見つめる。ほんの数秒。だが悟飯にはとても長いような時間に感じられた

吸い込まれるような緑色の綺麗な瞳。とても落ち着く。

「リヴェ、リア、さん」

「安心しろ、怖がることはない。……ほら」

「あつ……」

優しく包み込むように抱きしめる。慈愛の女神にも似た温もり。やがて泣きつかれ

た赤ちゃんのようにな

悟飯も落ち着きを取り戻し、いつの間にか揺れも収まつていた

「悟飯、今日は疲れただろう。このまま寝るといい

そういう頭を撫でてあげると、悟飯は幸せそうに目を細め次第に寝息を立てる

「スー・・・スー・・・

「一件落着、かな？ 流石だねリヴエリア」

「流石ママや！」

「・・・口キ」

「は、はいいつ!! ビクツ」

「悟飯を布団へ寝かせたら、わかるな・・・？」

「はいわかつております・・・」

そういうつて即座に正座をし待機する口キ。苦笑いをするが止めることはないフイン
そんないつも通りのやりとりだが正直安堵していた。

リヴエリアが一旦出ていき、それを確認するとまた口キがしやべりだす

「・・・孫悟飯、こりや大波乱の予感や」

そういういつも最後にぼそっと独り言をいう口キ

「最後の質問、うちのファミリアに入らへんか？・・・んなもん聞く必要ないわ、絶対入

れたる」

— short story —

悟飯を部屋へ送り届け、寝かせようとベットへ預けると違和感を感じた

— 悟飯が服の袖を握つて離さないのだ。

「なんという強い力なんだ・・・引きはがせん」

「んつ、リヴエ、リアさん・・・」

「ん? つと寝言か。ふふつ、可愛いな」

頭を撫でてあげるとニコッと笑う悟飯

— キュン//

リヴエリアはハートを打ち抜かれてしまつた!

「しょ、しょうがない・・・少しだけ、少しだけ付き合つてやるか」

そういうとリヴエリアは添い寝するような形で寄り添う。

そして自然と悟飯が裾を離すまで小一時間、付き合つてあげるママであつた

— 一方そのころ —

「僕はそろそろ自室に戻らせてもらうよ」

「えっ? フイン? うちをヒトリにするんか? 裏切るんか!?!」

「だつて僕は言われてないし、んじゃ先に失礼するよ・・・頑張つてんね」

こうして足の痺れた神様は悶え苦しむ夜を迎えるのであつた

第3話

—早朝—

悟飯は気付くとベットの上で寝ていた。昨日は質問を受けていたはずだつたが、途中からの記憶がなかつた

・・・疲れて寝てしまつたのだろうか。申し訳ないことをしてしまつた、などと考えながら体を起こすと

まだ外は少し薄暗い、だいぶ早く目が覚めてしまつたようだ

「そうだ、昨日案内してもらつた鍛錬所・・・中庭だつたよね、いつてみよう」

そういうと自分の愛用している紫の胴着を整え、中庭に向かうのであつた

・

やはりというか、こんな早朝である。人はいなかつた。

悟飯はしつかりとストレッチを行う。体が温まつてくると徐々に虚空へと拳や蹴り

を繰り出す

始めはゆっくり、確認するように・・・段々とスピードをつけて更に激しくなつてい
く

「ふつ・・・はあ・・・・！やあ！」

シユババババ・・・シユツ！ズシャツ

素早い突きや蹴りが風を切る。繰り出される攻撃は目では追えないようなすさまじい早さである

だが当の本人、孫悟飯は特に息を切らすことなくゆっくりと息を吐いた

「ふう・・・あ、あの～？何かご用でしようか？」

悟飯は少し前から誰かに見られているのは気付いていた。同じく鍛錬に来たのかと思つていたのだが

中々姿を現さないので声をかけてみた

「！・・・氣付いてたの？」

姿を現したのは少女・・・と言つても悟飯より少し年上であろう、とても整つた容姿であり

金髪ロングの髪が美しいアイズ・ヴァレンシュタインであつた
「はい。もしかして僕、邪魔でしたか・・・？」

「そんなことない。私こそ鍛錬の邪魔して、ごめん」

「いえ！そんな、邪魔だなんてとんでもない！僕こそ勝手に使ってごめんなさい！」

「ここは誰のものでもない。早いもの勝ち。だから大丈夫だよ」

「そ、それならよかつた。あつ、でも僕そろそろ戻りますから！」

「そういうて去ろうとすると、アイズが引き止める

「ちよつと、待つて。・・・君の動きすごかつた」

「べ、別にそんなことはー」

「見えなかつた、君の攻撃。とつても早くて鋭い。」

「えつと、ありがとうございます！」

悟飯はなんか照れくさいな。そんなことを思いながら頭をかいているとアイズから
思いもよらない言葉が飛び出す

「・・・お願ひがあるの。私と少し手合せしてくれないかな？」

「ええ？ほ、僕なんかですか!?」

「ダメ、かな・・・」

見てわかるようにシウンとするアイズ。そんな姿みて断れるはずもなく悟飯は即
答する

「いえいえ！全然いいですよ！だからそんな顔しないでください！」

「ありがとう。それじゃ、早速始めようか」

そういうとアイズは用意していた木刀を構える

「は、はい！」

悟飯も準備OKといった感じで構えをとる

「ルールは、どうしよう？先に一撃当てたほうが勝ち、でいいかな？」

「わかりました」

単純明快なルール。双方合致した時点で試合のゴングは鳴っていた

「それじゃ、いくよー」

そういうとアイズは強く地面を蹴り、一気に距離を縮める

「はっ！てやあ！」

素早い切り下げるから、連続で切り替えしての横切りを繰り出す

「よつ、うわつと」

・・・が攻撃はあるどころか、かすることすらなかつた

間合いは完璧だつたはずだ。なのになぜ？

「まだ、まだ・・・！」

今度は接近しながら突きの連打。これまた目にもとまらぬ速さでの連撃だ

・・・しかしこれもまた一発も当たることはない。やはりそうだ。すべて見切られて

いる

流石のアイズも動搖を隠せずにいる。彼女自身、まだまだ成長過程ではあるが剣術に
関しては

多少の自信があつたのだ。しかし当たることは一切ない。

悟飯は真剣な表情でこちらを見ている。が、まだ窺っているのか攻撃してくる気配はない

「そつちが来ないなら、こつちからいくよ……！」

フェイントを混ぜての攻撃。間合いギリギリからの攻撃。さらにはさつきよりもより一層

激しい突きの連撃。……しかし一切あたることはなかつた

「なん、で……」

「……」

息を切らすアイズ。それとは対照的に一切疲れを見せない悟飯

「はあ……はあ……ねえ、君。なんで攻撃してこないの？」

「かわすのに精一杯なだけですよ」

「「ツ！嘘、本当はいくらでも攻撃できるチャンスはあつた。」

「そ、それは……」

「手加減、しないで!!」

「ツ!!」

「私はそんなの、望んでない!!」

突然の大声に驚きながらも、それが彼女の本意なのだと悟った。
すると悟飯はジリジリと深く構え攻撃の態勢に入ろうとしていた
「わかりました。では、いきます!!」

シユン——

「?」

瞬間、アイズの目の前から悟飯の姿が消える

「はあ!!」

そういうと上から声が聞こえ、と同時に悟飯はかかとおとしを繰り出した

「まずい!!」と本能で悟ったアイズは間一髪バックステップで難を逃れる
しかし悟飯はすぐさま体勢を変えアイズの懐へと飛び込んでくる

「やあああ!!」

勢いをそのまま懐へのヒジ攻撃!!!

アイズもよけようと必死に構えるが、一歩及ばなかつた

「ツ!! 「目覚め——(間に合わない!)」

エアリアルが発動する前に攻撃が当たる！ そう思つた瞬間

「そこまでー！！」

後ろから怒声が聞こえる。と同時に悟飯の攻撃もピタリと止まつた
軽い風圧でアイズは後ろへよろめくとそのまま腰を落としてしまう

そんな中、確実に怒つてるのであろうエルフの女性が二人のそばまで歩み寄つてくる
「お前たちは、こんな朝早くから何をしてるんだ！」

怒りを露わにしながらもどこか悲しそうに眉をひそめた、この世界で最も二人の理解
者である

リヴェリア・リヨス・アルーヴであつた

この後事情を話すもリヴェリアの怒りはおさまらず、朝食の時間まで長々と説教を受
けたのだが

それはまた別のお話・・・

第4話

リヴェリアの説教も終わり、朝食を済ませた悟飯は早速ロキに捕まる

「ゴハーン、この後ちょっとええか？」

氣さくに話しかけてくるロキに悟飯も笑顔で答える

「はい、大丈夫ですよ！また何かお話ですか？」

「せや。とーつても大事なお話があるんや」

昨日と少し雰囲気が違うのを察し、悟飯も気持ちを切り替える

「・・・わかりました。」

「んじや、うちの部屋いこつか！」

部屋に着くと昨日と同じくフインとリヴェリアが。その隣には昨日の夕食の時に見かけた髭を生やしたおじさん

ロキ・ファミリア最古参メンバーであるガレス・ランドロック。それと朝手合せをし

たアイズの4名がいた

「お！みんな揃つてるな！」

そういうと口キは開口一番直球を投げる

「昨日はほんまにすまんかった！流石にウチもやりすぎたって反省しとる」

「ええそんな！僕も勝手に眠つてしまつてごめんなさい！」

「……ん？悟飯昨日夜なにあつたか覚えてへんの？」

「え？えーっと口キ様の質問を受けている最中、急に頭が痛くなつて……その後寝てしまつたようで」

「そ、そか。なんちゅーがあれや、疲れてるところ長々と付き合わせて悪かつた！」

口キもこれ以上のことは言わないほうがいいだろうと察し、話はここで一旦区切る
フインやリヴエリアもその方がいいと思つたのか特に指摘することはなかつた
「んでや！早速本題やけど、悟飯！うちのファミリアに入らへんか？」

「ええ！本当にきなりですね！」

「ちなみにここにいる4人には既に了承済みや！みんな昔からのメンバーやし、悟飯の
ことは引き入れても

「なんら問題ないつて思つてるみたいやで！」

「そう、ですか。うん……（でも確かに行くあてなんてないしなあ）わかりました!!

僕なんかで良ければ是非！仲間に入れてください！」

「よつしやー！もう証言はとつたで！？みんなも聞いたな？今からやつぱやめた！なんてのはなしな！」

「はい！わかつてますよ！」

「そうと決まればや！もう早速うちの眷属としての証を刻むでー！」

そういうと部屋にいたみんなは一度外に出て行ってしまった

「あれ？みなさんどうしたんですか？」

「いいか？眷属の証、恩恵つちゅーのを刻むんや。昨日話したやろ？ファミリアの一員にはみんな証として

恩恵を授けるねん。」

「はい」

「んで、恩恵つちゅーのは要は個人情報みたいなもんや。あんまり他人に見せたりとか本来はしないもんなんやで。

だからプライベートを守るために恩恵を刻むときには一人一人行うんや、わかつたか

？」

「わかりました！」

「素直でよろしい！んじや上着脱いでなく。恩恵は背中に刻むからな！」

「ほえ～、そなんですね！わかりました……んしょ」

胴着を脱ぐと、まるで年頃の少年の体とは思えない筋骨隆々な肉体が露わになる

「……なんちゅーかほんまに凄いなゴハン」

「そうですかね？」

「（自覚なしかい……）もつと自分に自信もち？思つてる以上にゴハンは凄いんやで」「え、えへへ／＼／＼なんか照れちゃいます！ありがとうございます！」

（めっちゃ素直やし、ゴハンが女の子なら間違いなく爆発しどつたな……）

そんなことを考えつつも準備は整い、ついに恩恵を刻むときがやつてきた

「んじやそこのベットに俯けになつて寝といて～」

「はい！」

「よいしょと……んじや始めるで～」

そういうと自分の指から血を滴らせ、背中に文字を刻んでいく。

少しすると一瞬背中が熱くなり発光すると徐々に熱が収まる——

「よつしや完了や!!んじやそのままステイタスも更新するで～」

「お願ひします」

ロキも内心ドキドキのまま作業を進める。少しするとロキの顔がドンドンと青ざめていき

やがて更新が終わるころにはもはや半べそ状態でボソボソと何かを呟いている

「なんやこれ・・・なんやこれえ・・・どういうこつちや・・・」

「口、口キ様？どうかしたんですか？」

「ーツ！いーやなんでもないで！！ゴハンは気にせんで大丈夫や！！」

元気いっぱいに答えるが声が震えている。だが悟飯も追及することはなかつた

「そ、そうですか」

「ああ！なーんにも氣にすることないで！よつしや！終わつたでー！これで晴れてゴハンもうちの

眷属や！これからよろしくなー！」

そういうと「みんな！もう入つてええでー！」と廊下へ声をかける
すると待つていたみんながまた中へと入つてくる

「無事に終わつたみたいだね」

「おー！改めてゴハンはうちらの家族や！仲良くしてやつてな！」

「よろしくねゴハン」

「はい」

「よろしくな」

「よろしくのう坊主！」

みんなそれぞれ挨拶をしてくれる。悟飯も満面の笑顔で答える

「よろしくお願ひします！」

「よしそれじやゴハンの部屋の手配やけど、すぐには用意できへんからとりあえずは客室でもええか？」

なるべく急いで用意するけど

「はい！大丈夫ですよ！」

「それと、どうせやしそのまま冒険者登録もしてきたらどや？」

「冒険者登録、ですか？」

「そうや、いずれ戦力になつてくれる信じてる。だから今のうちにぱぱつと登録すませてきただええんや

ないかと思つてな？ダンジョンに行くには必要なもんやし」

「そうなんですね！わかりました！でも場所とかがわからないんですけど」

「それならアイズたん、お願ひしてええか？」

「ん、わかつた」

「ありがとな！そんじやよろしく頼むで～！」

「それじやいこつか。」

「はい！お願ひします！」

そういうつて二人はギルドへ向かう為にでていった

——ロキの部屋——

「それで、僕達を残したのには何か理由があるんだよね？ロキ」
「そうや」

真面目な声色のため、フインも率直に聞くことにした

「ゴハンのことだね。何かあつたのかい？」

「どうもこうもあらへん。あれはマジもんアカン。なんちゅー巨大な爆弾抱えてしまつたんや」

「・・・それはどういうことだ」

「本来はアカンのやが、これはマジでうち一人じやどうしようも出来ん。みんなの協力
が必要や

絶対に内密に頼むで。このことは他言無用や」

そういうと、悟飯のステイタスがのつた写しを見せる。その内容に見たもの全員が驚
愕を隠せないでいる

「——ツ!?これは!?!」

冒險者 L V. 1

力	E	X
耐久	E	X
魔力	I	
敏捷	E	X
器用	E	X
戰士	S	
	9	9
	9	9

『スキル』

【超サイヤ人】

・全ての【ステイタス】の大幅増加

【超サイヤ人II】

- ・全ての【ステイタス】の超大幅増加
- ・限界を突破する

・感情の制御不能

・怒りの感情の増加により効果向上

【■■の呪い】

- ・傷を受ける度に力の増加
- ・理性を失う
- ・衝動が収まるまで破壊行為を行う
- ・任意では発動、解除できない

——この日、オラリオ最強にして最恐の冒険者が誕生したのである